

こども 教育 文化

第6号

もくじ

蛙とハエと子どもたち

授業を創る

考えない私になつてしまひそう

田中さんの手紙を読んで

宮城の教育遺産。

国語教育人・夜話

校長は子どもに対してもつと威厳をもてという人々に

佐藤 正夫：1

真山 栄子：6

田中 京子：9

赤松 世：11

丘 幾之助：13

菊地 新：18

蛙とハエと子どもたち

■5月9日 小川探検だ

学校下の信号を真つ直ぐ進むと、別世界が広がっていました。田んぼには水が張られ、土の堀が流れ、休耕田はタンポポで黄色に染まっています。気温も上がり、長袖が暑くて脱ぎたいほどでした。子どもたちは朝から準備していた、網や虫かごをかついでやる気満々で歩きました。

ずいぶん楽しみにしていたらしく、朝から水筒の中身を飲んで怒られたのが二人。出かけるのは2時間だから、算数と国語は持つてくるように話したのに、何にも持つてこなくて説教されたのが二人。網はなくてもいいんだよと念を押したのに、どうしてもほしくて、ん？ それそばをゆでるや

つじやないの？

あははははは

……。さすが2

年生だと笑えま

した。

彼らは、めだ

かや魚が捕れる

と思ったようで

したが、いたの

はかえる君でし

た。次から次か

ら捕獲され、な

ぎさちゃん

佐藤 正夫



ちっこい水槽には10匹以上がげこげこと詰め込まれていました。

■教室で飼いたい！

「こんなに蛙ばかり取ってきてどうすんの？」
「教室で飼うの！」「全部飼いたい！」「だめだめだめだめ。これじゃ多すぎる。」というわけで、2匹だけ教室で飼うことになりました。残りは家で飼いたい子が持ち帰ったり、逃がしてやつたりということで落ち着きました。さっそく子どもたちは図書室に走り、何をエサとするのか、住みかはどうのように作るのかを調べてきました。

「分かった分かった、クモやハエ、蚊たつて。」

「ふくん、ということは、生きて動くものじゃないと食べないってことか。バシッ！ て、つぶし

たハ工をあげてもだめなんだ。それは大変なことになるなあ。」と、全員に向かつてエサを強調しておきました。もちろん、エサをあげなければ、空腹で天国に行ってしまうことも話しました。

「ハ工は早く取れないけど、クモならいるところ知ってるよ。」と、いおちゃんが言うので、「おれも知ってる!」「私も知ってる!」と、中庭に飛び出していきましました。

でも、何でもそうですが、面白がつて取りに行くのは最初だけです。それが子どもというものでしょう。そのうち逃がしてやらなきゃと思つて見ていました。

■5月13日 ハ工取ったぞ〜!

「先生、ハ工捕ってきた!」と、とわくんが誇らしげに網を抱えて戻ってきました。

「なに、それはでかした! 大したもんだ!」と誉めると、毎日どこかでハ工を捕獲しては水槽の蛙にあげるようになったのです。取ってくるたびに私が、「隊長、本日もご苦勞様であります。」とふざけて敬礼なんかするもので、「ほくも網使いたい!」「ほくにも貸して!」と、ハ工取り仲間が増えていきました。

いつだったかとわくんが、「先生、ぼく、かえるがハ工をばくとやるところ見た。」と言つたのです。「えっ! 食べる瞬間見たのか?」「うん!」あ、それは俺も見なかったな、とうらやましくなりました。何しろこれまで、教室で蛙を飼つたことな

どなかったのですから。その時、とわくんがこうも熱中するのは、そういう場面をしつかり見たからなんだろうと思いました。そうか、水槽に群がってる子どもたちは、ハ工を食べる瞬間が面白くて、集まっていたんだと気付きました。

次の日、ハ工取り隊員のゆうとくんが、「でっかいハ工取ったぞ〜。」と戻ってきました。見るとそれは銀バエの親分でした。私は「こんなでかいハ工は無理なんじゃないの。」と言いなながら、群がってる子どもたちを押しつけて、水槽に目を近づけました。だつて蛙君はかわいい。あまがえる。なのです。しかし、私たちの目の前であまがえる君はばくとと銀バエに食らいつきました。銀バエのおしりが口からはみ出しています。見ていた子どもたちは、「お〜! 喰つた喰つた!」と声を上げて眺めました。

子どもたちをこんなに引きつけるなんて、蛙つて偉いやつだと思いました。

かえるをおともたちといっしょに見ていました。
すると、かえるがはえをたべたからびつくりしました。
もう一ぴきがくもをたべました。 ちよっときもちがわるいなとおもいました。
こゆき

べろくん

きょう、はるやさんといっしょに、ひるやすみに、にわとりごやのうしろではえをみつめました。はえがとまつてるあいだにバシツとつかまえました。

つかまえてもどるとき、ろうかではるやさんが、「このはえでかいね。」といいました。きょうしつにもつていって、ふたりで「めちやくちゃでかいはえとつたぞ〜。」といいました。

ぼくがふたをあけて、はるやさんがはえをいれるほうをしました。はるやさんがいれてから、ぼくがふたをしめました。

ぼくとはるやさんが「ねらつてる。」といいました。たべようとしているときに、べろがべろ〜んとでいました。さいしよに2かいはずしてから、3かいめでとびついてたべました。はえとりたのしかったです。

ゆうと

■5月17日 ハ工だ! ハ工だ!

繰り上がりのある足し算の勉強の時でした。誰かが「ハ工だ!」と天井を指さしました。そうしたら、次から次から上を見上げて「ハ工だ!」「ハ工だ!」と騒ぎだし、勉強どころではなくなつてしまいました。しかたがないので私も一緒に「ハ工だ! ハ工だ!」の合唱に加わりました。見て



いると、素早く入り口のドアを閉める子、窓に走り寄ってパンパンと閉める子、ベランダから網を持ち出してハエを追いかける子、その子の網を取りかえそうと追いかける子が2、3人。放っておくと必ずケンカになるので、「駄目！ 順番で！」と大声で制しました。

何しろ気ままなハエですから、そう簡単に捕まるものでもありません。蛍光灯に止まったり、天井の柱に止まったり、子どもの肩に止まったり、大騒ぎは10分ほども続きました。ようやく窓に止まったところを網でバシッと押さえることができました。やれやれと思っていると、ハエは窓にへばりついたままなので、網を離すと隙間からすぐに逃げてしまいました。あくどみんなのため息が漏れ、また追いかけてこの始まりです。最後は窓に追いつめたところで誰かが、「網の上から手で押さえたら逃げないよ。」と妙案を出し、無事確保。すぐに蛙君の水槽に入れ、みんなで眺めました。

私は、もう、勉強する気はなくなっていました。この後、ハエ騒動は時を選ばず度々起こりました。どんなに集中しているように見えても、暇なやつがついついハエを見つけてしまうのです。そのたびに勉強は中断することになりました。正確に言えば、ハエを見つけると子どもたちの捕獲スィッチが入ってしまうので、もはや私の力では、どうにもならないというのが本当のところでした。

■6月10日 今は駄目！

給食を食べようとしていた時のことでした。また、あの「ハエだ！」が始まろうとしました。「駄目！ 今は駄目！ 追いかけて回したらほこりやゴミが降ってくるよ。」私がそう言うと、今回ばかりは、「うわあ、給食にゴミ入るのやだあ。」と納得してくれました。

でも、一度目にしてしまったハエは気になるようでも、あつちだこつちだと食べながら目で追いかけていました。例のごとく窓は全て閉めてしまったので、暑くてたまりませんでした。片づけが終わるのを待って、教室組と鳥小屋組に分かれてハエ取りに走っていききました。

■7月5日 宮本武蔵

この日も給食時間にハエが発見されました。「いいから、自由にさせとけ。」と言ったものの、おかずや食器に寄ってきて、はなはだ迷惑していました。ハエにしてみれば当然の動きなのですが、食

べながら私は宮本武蔵の話をしてやりました。「日本が一番チャンバラの強かった人はな、宮本武蔵って言うんだけど、飛んでるハエをな、二本の箸でパシッと取ったんだぞ。」「ええ〜！ 箸で取ったの？」「す〜く〜い！」すでに何人かが箸でハエを追いかけて始めています。

「先生は宮本武蔵じゃないから箸では取れないけど、これで取ってみせる。」とメダカ用の小さな網を持ち出しました。「わはははははは……」「がんばって！」「そんなに小さいのじゃ無理でしょう。」こんなことして何をしているんだらうと思いつつも、教卓に止まった瞬間を見逃さずパシッとかがぶせると、見事ハエを閉じこめることができました。「どうだ！ 宮本武蔵だあ〜」すると、全員から「すごい。」だの「二発で仕留めた。」だのと誉められてしまいました。たかがハエ一匹で、こんなに誉められるとは。

何にでも首をつつこんで引つかき回すかなと君は、この小さな網を使いたくて、給食時間になると手に持ってハエを探すようになってしまいました。探さなくていいのに……。

サツ

ぼくがかえるのえさとりにいつてるばしよは、二かしよあります。

とりごやのちかくと、そのトイレのとなり
のところのいつばいいます。そこに、えさをとりにいきます。

はえをとつたら、あみのつかまえるところをつかみます。あと、はえは、はやいです。はえのうごきも見て、はこの上にとまったらパシッと、つかまえます。
はるや

■7月12日 名人になる

右の文は5月に書かれたものです。ぼくの上にとまったらパシッと、捕まえるということは、ハエが一瞬動きを止めるのを待つんですね。そのためハエの動きをよく見るのです。ハエ取り隊員はこうやって目を鍛え網を振るタイミングをつかんだものと思われます。

そしてこの日、隊長に昇格していたとわ君が、「先生、飛んでるハエ取れるようになった！」と網を抱えて戻ってきました。「さすがハエ取り隊長！ そりゃ名人だな。」とみんなの前で誉めました。

よくよく考えてみれば、ほぼ2ヶ月の間、毎日毎日ハエを追っかけ回していたんです。腕が上がるのは当然のことでしょうね。

このころになると、はるや君やるい君も、一匹だけで戻ってくることはなく、網に数匹入れてくるようになりまし。 「一振りです3匹捕まえた。」とか「逃げられない方法考えた。」ということも聞きました。いつの間にか、みんなハエ取り名人になっていたのです。

また、この間ハエ以外のものも取ってきていま



さんの子が群がりました。パケットとやるたんびに歓声が上がりました。何でも食べるものなんだなあとその時思いました。でも、ハチは食べませんでした。一旦口に入れたのですが、すぐにはき出してしまいました。どうやって危ないと認識するのか、とても不思議でした。

■7月19日 そんなにいらね!

夏休みを数日後に控え、生き物をどうしたいか尋ねると、ほしいという子が何人か出て来ました。無理しないで逃がしてもいいんだよ、と説得を試みましたが、なぎさちゃんが家でも飼ってるからということを持っていくことになりました。

長きに渡って楽しませてもらった蛙君のために、ハエ取り隊員達はこれまでにないほど張り切つてハエを捕ってきました。水槽の中は、ハエに襲われる蛙、と言つてもおかしくないぐらい黒っぽくなっていました。腕の上がった名人達がどんどん取ってくるので、「もういいよ、十分だから。蛙

君目回してるよ。」と止めさせました。初めは飛びついて食べていた蛙君も、ぶんぶん飛び回るハエに見向きもしなくなりました。でも、時々、ケロケロ、ケロケロと鳴いて、何か言いたげな感じでした。

子どもたちは、さようならの後、蛙君にも「元気でね!」「またどこかで会おうね!」「ばいばい。」と声をかけて教室を出て行きました。

ハエ取り隊員達には、虫取り網を持ち帰るように話すと、「先生、ぼくのは輪っかが外れてよれよれです。」「網がくさいです。」とのこと。自分で修理して、今度はトンボやセミなど、網本来の目的に使ってくれと励まして帰してやりました。

■生き物とのくらし

蛙の工サは動く生き物だということを知っていた私は、正直飼いたくないなあと思いました。どうせすぐに飽きて、死なせるだけだとも思いました。一週間ぐらい飼って、後は逃がしてやることになるんだろうと置いていました。まさかこんなに長く関わることになるとは夢にも思いませんでした。ハエ取りに夢中になるのは何なんでしょう。時々、「隊長、ご苦労さんです!」と敬礼などして誉めてはいたのですが。

「あたまからかえるへ」スケッチ



かえるのたまごも同時進行で育てました。おたまじゃくしが生まれ、やがて手足が出、しつぽが短くなり、ついに立派な蛙の形になりました。子どもたちはその変化も面白かったみたいで、煮干しだのおひたしだのを持ってきてよく世話をしました。何より私にとって初めてのことがばかりでしたから、子どもと一緒に楽しむことができました。

そのうち、ダンゴムシを飼ってみたいとか、カナヘビも育ててみたいという子が増え、水槽の数も増えていきました。子どもが面白がるものには何でも乗っかってみよう、後をついていくだけでしたが、なかなか面白い日々だったなあと思っています。

(仙台・川前小)

授業を創る

真山 栄子

子どもたちの心は動いたのか？ ……頭に入れただけのものではないか……。

そう思うと、指導計画を変えなくてはならなかったのです。すぐに準備をしなければなりません。ここから、もう体が動き出したという感じですよ。ここに、その実践の報告をします。

1 めあてを持たせればいいのか

今年の6月に、4年生の国語科の『話す・聞く』の学習で『工夫してメモを取る』の単元を学習した時のことです。

「12月に、みんなで味噌を作ろうと思います。授業の最後の日に栄養士の先生から『味噌の作り方』を話してもらおうので、正しくメモが取れるように勉強していきましょう。」と、話しました。

「味噌の作り方」の文章は教科書にはありません。昨年、大豆を栽培して、『豆腐づくり』や『きなこづくり』をしてきたので、子どもたちは『味噌づくり』にも興味を持ち、学習に取り組んでくれる

と思いました。いくつかの参考文献を手直しして原稿を作りました。

授業の第1時は、教科書例文の『梅干しの作り方』を聞き、その全部を書こうとせずに、何をするのか、その理由は何かを押えること。接続詞に気を付けて「はじめに」は1番、「次に」は2番と順序立てて整理して書くことや、矢印や図で省略することなどを理解させ、メモを書かせました。

第2時は、教科書参考資料の『手漉きはがきの作り方』を聞いて、必要なことをメモに取る練習をしました。紙を漉くという作業をしたことがない子どもたちだったので、「漉き枠」や「網」の实物をみせたり、作業写真を見せたりしました。それでも、『梅干しの作り方』より書けない子がいました。後半は、大切な事柄が抜け落ちることなく書けているか、4・5人のグループになって確かめ合い、メモを仕上げさせました。

学習計画では、次の3時間目で、ここの学習が終わろうとしていました。確かに子どもたちは、

メモを取ることに慣れてきました。でも、私は、子どもたちの学習への反応に、物足りないものを感じました。子どもたちは、メモの良さを感じたのだろうか、と。

何も感じなければ、学習した後も子どもは以前と変わらないのではないかと。子どもたちにもっと、学び甲斐を感じさせる授業でなければならなかったと思いました。

それで、体験活動を入れてメモを取る学習を試みようと考え、急いでその準備をしました。

2 ものづくりと

メモを取る学習をつないで

3年生の理科の授業で綿を育てるようになりました。昨年、寒冷のため栽培が難しいとされた仙台でも、十分な暑さとなり、綿実がはじけ、内から成熟した白い綿があふれ出たのです。収穫した時、「繊維革命」とも言われる綿を、いつか教材にしたいと思っていました。

種から伸びた繊維を取って、指で擦って糸にすること。さらに、その糸から布を織ることができるところを、小さな作品づくりを通して体験させるのです。

自分の手を動かした時、子ども自身が何かを感じ、試行錯誤をしてやり遂げようとしながら、何かを獲得するのです。受身ではない学習です。

その後、自分の体験をもとに、その手仕事の手順や注意事項をメモに取り、そのメモを持って、

隣のクラスの人に一对一で教えに行くことにしました。

ひとり一人が、伝えなければならないという必然性を持ってメモを取るの、子どもは本気になるだろうと思いました。

3 総合的な学習の時間『糸から布へ』

コットンボールを渡し、柔らかな触り心地を味わせます。中に硬いものがあり、それが種です。織維と分けさせます。左手で織維を持ち、人指し指と親指で少量を引き抜きながら燃つて見せます。「糸だ。」と納得したら、いよいよ子どもたちの挑戦です。

指先に気持ちを集めて、細く長く……糸らしくできても、時間がかかることがわかったところで、たくさん糸を紡ぐために、道具を使った紡

ぎ方を実演して見せます。スピンドル（こま）で、そして糸車です。シルシルと糸ができたので、大きな拍手が湧きました。子どもたちは『ためきの糸車』のお話の場面を思い出していました。

その次に、晒し布を（5cm×5cm）配り、糸をほどきながら、布のしくみを見つけさせます。「経て糸によこ糸が、上・下・上・下と通っている。」と見つけたら、厚紙（7cm×5cm）に経糸5本（たこ糸）を張ったものを配りました。そこに、紡いだ綿糸を通します。

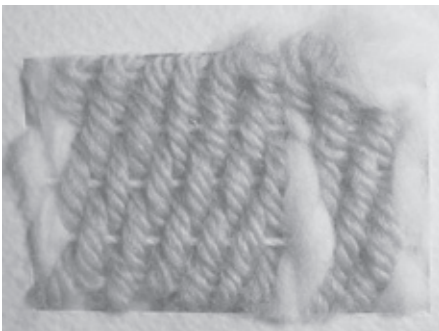
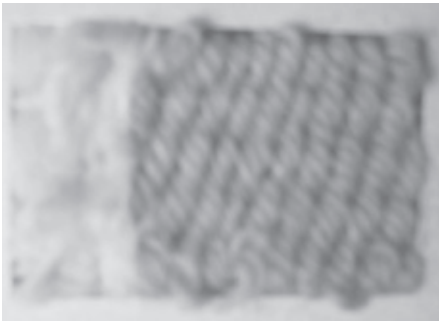
ほかに、染めた毛糸を用意しました。白とピンクと黄色の3色の配色を考えて、よこ糸を通していくのです。ひとり一人違った表情の作品になります。

感想文には、知る喜びや新しい学びの楽しさが書かれていました。また、人との違いの良さを感じ

じ取ったり、先人の知恵に驚いたりする子もいました。

〈子どもたちの感想〉

- ・綿から糸の作り方が分り、糸をつむいで布になった時、「本当に布になった。」とびっくりしました。
- ・布が糸からできたと分ったときに、最初は細かった糸が、こんなきれいな布になるなんてすごいなと思いました。
- ・布は、たて糸によこ糸が上、下、上、下、と交互になっていることが勉強になり、やってみて、自分で分かったことが一つふえました。
- ・綿から糸になって、糸から布になるしくみが分り、この授業をしてよかったですと思いました。初めての体験でしたから楽しくできました。世界でたった一つだけのぼくの宝物が一つふえました。
- ・「Kちゃんらしい作品だね。」と友だちに言われてうれしかったです。（みんな、ちよつとずつちがうもようだな。）と思いました。休み時間でも布を作るのが好きになってやりました。楽しいなあと思いました。
- ・綿から糸になるということを知りました。厚紙に布



を織ろうとしたら、むずかしかったです。それで、昔の人は工夫していたことが分りました。先生の持っていた毛糸は、さくら染めと桂染めの糸で、店で売っている糸よりもきれいでした。

・ 綿↓糸↓布の勉強をして、手でやるのはむずかしかったので、服を作るのはもっと大変なんだなあと思いました。

・ ぼくは、布を織る時、最初はぐじゃぐじゃしてしまっただけ、先生に教えてもらったり、友だちに教えてもらったりして、やっとうまくできました。時間がかかったけど、うれしかったです。

友だちのやさしさに気づくことができた子もいました。子どもたちは、手を動かすことで、心を動かす、人として育っていくことの表れだと思いました。

5 メモの大切さがわかった

「総合的な学習の時間」1時間で作品ができ、次の時間は、隣のクラスに教えにいきましました。まず、織り方のメモを取らせました。そのメモを持って、子どもひとり一人が教える活動をして、教室に戻ってきました。

感想を尋ねると、KT君が真っ先に、

「今まで、メモなんてどうでもいいと思っていましたが、大切たということがわかった。」

と、発言したのです。私は、この一言で満足でした。メモは、人に教える時に、正しく伝えることができ便利だし、自分でも忘れるから役立つと言ったのでした。また「自分が経験している、メモの間違いに自分で気づくことができる。経験しないことは、ただ書いただけ」と言うのでした。学ぶ実感のない学習であったことを反省させられました。

6 終りに

子どもたちに本当に力をつけたいと願った時、自分の持っている最良のもので勝負しなければならなかったのです。もちろん、自分がやりたいと思うもので、そうでなければなりません。やりたいと思うものであれば、手間暇を惜しむことはないからです。そして、私の本気は、子どもたちにも伝わっていったのかもしれない。

前に受け持った2年生の子が、好きな詩を選び、これを朗読してくれました。その詩は、彼の純真さを忘れず、今、教師としての私が大事にしなければならぬものは何かを示す詩になっています。大切なことをもつと感ずることができるようになるために。

せみ

有馬 敏

じぶん じぶん じぶん

じぶん じぶん じぶん

じぶん じぶん じぶん
じぶん じぶん じぶん

じかーん じかーん じかーん
じかーん じかーん じかーん
じかーん じかーん じかーん
じかーん じかーん じかーん

じゆう じゆう じゆう
じゆう じゆう じゆう
じゆう じゆう じゆう
じゆう じゆう じゆう

(仙台・榴岡小)



考えない私になってしまいそう

—K先生への手紙—

田中京子

国語大好き人間だった私なんだけど、中学の国語は大嫌いです。本当に、9科目の中で、唯一嫌いなのが国語です。

使っているのは光村図書の『国語I』というのだけれど、とにかく厚い。地理の教科書よりか、ちよつと厚いくらい。そんなぶ厚いのを1年でやるなんて、不可能です、絶対に……。

真剣にやれば『ヒロシマのうた』のように十数ページに何時間も時間が必要なのです。小学校のうすい教科書でさえ、ギリギリでおわたたのに、忙しい中学生に、なぜ、6年の教科書の上・下かんあわせてもあと1冊分のよゆうのあるような教科書を作らなくてはいけないのでしょうか……。

そんな教科書を使いながらの勉強は狂っています。期末の前なんかメチャクチャです。国語の教科書の中に、フィリパ・ピアスの『水門で』という話がのっています。まえにこの人の書いた『トムは真夜中の庭で』という本を読んだ時に興味をもっていたので、けっこう楽しみだっただけで、運悪く、期末の直前にやることになってしまったのです。

さて、この『水門で』をどのようにやったと思いますか？

学校から配られたワークブックを手がかりにやっていったのです！

先生がワークブックの設問を読む。みんなが、それを聞いてワークブックに答えを書く。先生が正解を言う。こんなことは、だれだって一人でできます。うちでだって、休み時間にだって、給食中にだってできます。私はものすごく頭にきて、血がのぼりました。目に涙がうかびそうになりました。

だけど、ワークブックをやらなくては、テストでいい点がとれない……。そう、ワークブックの問題から、テストはできているのです。

中間で国語が悪かったのは、私がワークブックをやらなかったからでした。ワークブックには答えのコツがいっぱい書いてあります。だから、そんなに考えなくても、スラスラ問題が解けます（答え方はちがっていても）。そんなところが、私がワークブックを嫌いな原因でした。

本来、自分の頭の中にある全てを動員させて、必死で考える自分を「いいナール」って思っていたのに、テストの点だけのために、だれかの考えを参考に考える自分の姿がいやだったのです。だけど、そのワークブックをやらなかったことで、点数が悪かった自分にいや気がさして、私は、自分を捨てて、簡単に答えのワークブックをたよりました。国語だけは「いつもよくできた」と自分で一番自信のある科目なので、それが壊されていくのがいやだったのです。答え方やぬぎだす場所がちよつとずれていたくらいで、一点引かれたり×になる自分のテスト用紙がいやだったのです。だけど、いくら私が自分を捨てても、授業でワークブックを使うことだけは許さない……。

そう思った私は『水門で』のワークを、全部うちでやってきました。学校では2・3回にわけてワークを使って授業したけど、私

は絶対に、仲間に加わりませんでした。ワークを見てふりをし、教科書の面白い話を読んだり、絵を書いたりしていました。完全に、授業は聞いていませんでした。ただ、答え合わせはちゃんとしました。だって、期末のことがいつも私の頭にあったからです。

答えはほとんどあっていました。「このことから読みとれることを二つ書きなさい。」こんな問題、本当に答えが二つだけなんてことはないはず。前の文とかかわっていない文はないはずだから、いろいろあるはず。だけど、二つと書いているのだから仕方がありません。一番ちよいどいいことを書きます。書いてあるそのまんまを書きます。そうすると当たります。

いろいろ考えた末、やつとこみつけた答えを書くとき×になります。「文章中にある言葉を使っていない」とか「字数が多い」とかで。いつのまにか私にも、そんな都合のいい答えの見つけ方が身についてしまいました。そのかわり、本当に思っている自分の考えの表現の仕方を忘れてしまいました。

作文もそうです。「遠足のこと」とか、そういう一般向けは書けるのに、自分の心から思っていること、感動したことを書く機会がないので、本当に書けなくなっていました。実はこの日記の前に、もう三つ日記があったのです。Tのこと、イラクのこと、そして今私たちのクラスでやっている勉強を教えあう会のこと……でも、書きなれていなくて、どれもめっちゃくちな文になっていて、書いた私でさえも、何を言いたいのかわからない文章になってしまったのです。その時、初めて気づきました。中学校の国語の恐ろしさを。

期末のテスト、96点でした。ワークをやつて、プリントをやつて、その努力の結果です。だけど、ちっともうれしくありません。ワークをやつたから分かったことであつて、自分から苦労して考えて

分かったことじゃないから、すぐに忘れるでしょう。

国語の教科書の中でやつた『大人になれなかつた弟たちに……』も、いろいろ一生懸命考えたけど、ポイントは全部先生に教えてもらったから、あと1年もたてば忘れるでしょう。そんな、今だけの96点は、私にとつてた、たの苦しみだけなのです。ズルです。カンニングです。何が学年で二番の成績ですか?! ワークの答えをカンニングして書いた答えを見て喜べるほど、私は落ちぶれていません。

Tは国語のテスト、60点でした。私とTの差は26点ですが、本当はTの方が私なんかと違ってエライのです。Tはワークをやつていません。それでも一生懸命、本当に考え、一つ一つ書いていったのです。私みたいに「あつ、これ、ワーク・プリントをやつた問題だ!」と、答えをまるのみに書いたのとは天と地ほどの差があります。私、すごくTがうらやましかつた。努力でかちとつた60点と、他人が一生懸命に考えて出した結論をまるのみに暗記しとつた96点と……。

もし、ワークをやらなかつたら、私はどうなつていたでしょうか。自分の言葉を使つて書いたり、抜き出すかしようびみょうにズレていたり、よくて76点くらいでしょう。自分がいやになります。本当にいやです。何でこんなこと、しちゃつたんだろう。

ワークを10回くらい見直した私は、エライ人間の部類から見ると「勉強熱心な良い子」でしょう。だけど、それは本当の人から見るとカンニングです。人の考えを自分のものとするひきょうな人間のこういなのです……。

本当にいやです。感じているのは私だけかも知れないけど、みんなも確実に考える力を失っています。国語の授業はいつも段落に分けて、各段落ごとに先生がポイントを書いて、それをノートに書いて……。だから、どのクラスにいても、同じノートができ

あがりません。だれも何かを言うチャンスはないので、ただ聞くだけ。期末をちゃんと考えてる「いい子」はノートをとる。ただそれだけの授業。

そんな国語の授業の息抜きは、意味調べです。国語辞典をひくと、いろいろな言葉に出会えます。たったそれだけの楽しみです。先生は「うそだ。」と思うはずです。6年の時、意味調べが大っきらいな私だったのにね。だけど、本当です。それしか本当に楽しみがないのです。

そんな感じなので、確実に私だけでなくいろいろな人は考える力をなくしていきます。授業参観で『奈々子に……』をやりました。久しぶり、中学に入って初めての考える授業です。がんばって考えました。

だけど、難しい所の答えは先生が言います。簡単な所はみんなに聞きます。なんか、ぶじょくされてるみたいで、私は一回も手を上げませんでした。ただ、指名された時は答えただけ。みんなもだれも手を上げませんでした。答えはみんな分かっていたと思

うのです。だけど、みんなしらけてました。だれも全然授業にのりませんでした。それはそうでしょう。4月から、答えが分かっても先生が自分で言うてしまうので発言の仕方が分からなかったし、そういう形式の授業にもなれていないはずだもの。

中学校に入ってから、みんなの考える力を国語の教科書はもっていつてしまいました。

弁論大会の作文が味のないものになったのは、きつと私に上べだけの文章を書くくせがついたからだと思います。私はどうなつてしまうのでしょうか。もう、一生『ヒロシマのうた』のように考えるのは無理なのですか？

PS：こんなに書いたのは久しぶりです。すぐスッキリしました。手紙の中では、自分が自分でいられそうのでウレシイです。

だけど、やっぱり国語は大嫌いです。

(仙台・中一生)

田中さんの手紙を読んで

赤松 世

ている、考えあつて何かをつかんでいくプロセスを喜びと感じられる、ワークを真面目にやって点数をとったことを自らの墮落とまでとらえる感性のある、本当の勉強好きな生徒に、中学校は何を与えようとしているのかと、言われている。背中が重い。

考えるほどに、点数が悪くなる学び舎とは、何なのか。せめて、田中さんがどうして授業中にワークをするのを拒否していたか、先生に、ちゃんと

伝わってほしい。

中学校は、今どうなつてきているのだろう。先生になりかけの頃は、何人かで、ローソクの科学なんかを読んだり、授業をみせてもらったりしながら、やっぱり授業が大切、本来の仕事だ、という理解があつたように思う。

校内暴力がおきて、そして一見落ち着いてきたころからだろうか、「教師の本来の仕事は授業」という言葉がどこか青臭くひびき、大きな声でいう

「パンを求めている者に、石を与えている。」正直に言うと、それが田中さんの手紙を読んで、まず浮かんできた言葉でした。こんなに考えようとし

のは、気恥ずかしくなったのは。学校を支えているのは、生徒指導や部活動だというほうが、落ち着きがいい。

地区懇談会でのある父親からの発言。「金のある家の子は、塾だ、家庭教師だとつけられて、学校での授業はわかりきっているから授業中うるさいらしい。そんな所にやれないうちの子なんかは授業を聞きたいのに、うるさくて聞けないようだ。教育委員会なんかで、塾は学校の授業より絶対先には進まないように強く指導してもらえないものか。」恥ずかしくって、つい下をむいてしまった。

学校の一番の売りものの授業なのに、塾で一度やると、色あせて、そこから一歩も出ないような授業しか学校はしていないのではないかと、お父さんは心の中で言っている。生徒たちもよく口にする。「先生、それテストに出るの。それやると成績あがる？」なぜそうなるのか理由も求めず、全体の体系の中に位置付けることなくバラバラな知識でも、覚えさえすれば勉強なんだ、という貧しいイメージを、中学校は授業を通して、親にも生徒にもおくり続けているのだらうか。

部活動の免許も、しつけの免許も持っていない。唯一持っている英語の免許でまず仕事をしなさいよと、あちこちから本音の音が、聞こえてくる。

英語の方では、最近、声高に会話が大切。発音が大切といわれているが、「this」をどうして、「ティーエイチアイエス」でなく「ディス」と読むのか。ThisのSとisのSが同じ文字なのに、違う

音に発音されることや、日本人が発音するgeはどうか、そんなこともおかまいなしにThis is a geとすすんでいくのは、以前とあまり変わっていない。

今年、しばらくぶりに1年生を担当している。やる気満々の面々に励まされながら、文は単語の、単語は音節のあつまりであることをとらえ、音節から単音をとらえ、単音が母音と子音に分かれることを知り、日本語と大いに違う英語の音節のしくみの勉強にすすんだ時、小さい日本人たちは、バッグから「ウ」をとって発音しようと意識しました。その後、ひとつひとつの音のつくり方、その正書法へとすすんでいっている。

サークルの財産である、発音の教材に支えられて、授業をすすめているが、田中さんの手紙が、授業は、教材だけの問題ではないことも教えてくれている。栄養満点の食べ物、即、子どもの体に吸収されるのではないように、必要で重要な知識のつまった、体系のしつかりしている教材でも、こちらが、それを一定の知識としてとらえられないなら、やはり、知識のおしつけの授業にしかないのだらう。教師が、学ぶつらさ、学ぶ喜び、学ぶプロセスを、自ら、くぐっていないなら、田中さんの感性からは、ずいぶん遠い所にいることになるのだらう。

教材を調べるだけの時間もなかなかとれず、疲れて帰宅する現実と、授業にかけたい充分な

時間と心のゆとりとの大きな落差。

新任の頃、よく、先輩の先生にいわれた。「内容がないときに、次々と形を求めるもんだ。」という言葉にひっかかり、中学校が、形を整えることに、エネルギーを使いがちなのは、授業という中味がぬけかかっているからだろうかと思ってみても、どこから軌道修正をしていけるのか、見えない。でも、わたしのまわりにもいる田中さんと一緒に勉強していけるような教師でなかったら、教師になつたかいないかという思いは、はつきりしている。

(仙台・S中教師)

「カマロード」10号(1991年1月)、同11号(1991年12月)より転載



国語教育人・夜話

丘 幾之助

第一話

土曜会グループの素描

国語土曜会のことども

昭和六年も、おしつまつた十一月の末だった。

仙台に、国語土曜会という、少壮国語教育人の研究会が持たれた。どんな名がよいだろう、とすつたもんだの末に、毎月一回土曜の夜に集るんだから、というんで、あつさり、管野門之助のを採用しちまつたのである。会には、いつも十四五人から、二十人近くの人が集つていた。男師(男子師範)の、草紙や白秋研究で、本誌(「国語教育研究」)でもお馴染の木俣氏を相談格ということにして、上杉の横澤文質が、実質上の主催者だった。

教育・国語教育あたりからは、誰が書いたか、健全な発達なんだろうところが希望されたり、なんだかんだの風評はあつたがとにかくとしてこの会からは、国語教育人としての、偉者が出た。

いつも、十時の閉館——断つておくが、この会

合はいつも政岡屋でやったので、あすこは十時に店をしまふきまりなんである——が来て、話に熱が出てきて止められず、無理に出されつちまうと、凍てついた寺小路の舗道の上を、ひんやりした夜の大きに刺されながら、喋つて、歩いたものだ。

1、横澤文質の横顔

この会では、なんとと言っても、横沢文質が一番重厚だった。うつむきがちの、人懐こい顔をして、そう喋りもしないが、喋るとみんなを傾聴させた。集つた若い奴らも、「横沢さん」というと、その人格に敬意を表したようである。この人の半世は、相当苦勞をされたらしい話であつたが、そのため、ますます「人」を立派に磨いたものらしい。

読方教育論としては「表現順応の読方教育」というのがある。こつこつと、本気で読方を見ていった人らしいではないか。「生命の読方」とか、「行の読方」なんていうよりは、はつきりして、話は判るが、と思いつきでいうのは失礼だけれど、

横沢の立場より、もう少し科学的で、哲学的なのに「形象の読方」っていうのがある。このころは、どう変わってきたか、筆者が最初に訪ねて行つた時は、本の中に埋るようにして、子供なんか集めて自炊をしていたのに、この頃では、きれいな半分を足したというから、多分、長足の進歩があつたろうと思う。「あんないい人つてないな」友達はいつもう。

2、佐々木敏正を掘り出す

ところで、横澤文質を小さくして、もつとたくましい奴に佐々木敏正がある。

「用意ドン」の綴方が敏正の創案だが、用意ドンで、次々に意識したものを、みんな紙に塗りたくるというのである。「風。白い紙が飛ぶ、お母さんの顔。笑つた。便所の匂。」だから、こんな綴方があらわれようというのである。ところで、それから一年おかれて、ジュイスの、「意識の流れ」が、フランスから流れて来て、日本の小説界に、センセーションを捲きおこしたのだから、さんさんにそれをこきおろしたボクは今酸っぱい顔をしている。あんまり書いたりしないが、書けばすごいのが飛び出す。英独の語に通じ、学は漢学から、このころは禅をやっている。今は結婚して、相当にやつているが。

「結婚つてな、とにかく、生きものと、生きものの結合は、人を強くするな」

ボクはこの話を、上杉山の宿直室で聞いた時に、なんとも言えぬ、ロマンチックなものを感じたも

んだ。

3、活字引・佐々木正

南材の佐々木正は、会員のうちで、一番芸術家らしい風貌をしていた。あいつの綴方は、童心から社会意識へ走って、今やっと正しいレアリズムに帰った。綴方では相当以上に認められてもいいんだが、独立展や東北展などを、鼻歌でパスする絵画の実力が、いつもそれを乗り出させないでいる。

仙台の同学年研究会で、四年の「海」をやる時に、教育・国語教育にのつた、鈴木道太の「漁村哀歌」をプリントにして、いわゆる読方教育の現実的取扱いをやり、集った連中をアツと言わしたなんて、奇抜なところもある。「天が下に知らぬものなし」と言うのは、こ奴のことで、まずなんでも広く知っていて取り巻き連中を驚倒させてエツに入っている。

「社会的綴方なんていうのは、経済意識も、目的に取り上げてんな」「経済と言っても、アダム・スミス、この正統派や、マルクス主義、それにダグラスの信用経済学は、金融資本の『信用』に対する科学的分析から」

こんな調子である。

あれほどの活字引、ボクはまた「恋愛学」について、たった一つも、最も貧しい体験さえ聞かない。あんないい顔をしゃがって、だから皆、「奴、チンボコがないのかもしれない」と言っている。

4、五十嵐勝治は詩人

小牛田の五十嵐勝治は、天成の詩人である。土曜会では、そう多く喋らなかつたし、ずいぶん沈黙をしていたが、最近綴方生活に、その綴方論を発表するに及んで、一躍認められる不幸に接した。あいつはそれほど仙人で、ワイワイいわれるのが好きでないのかもしれない。小さい時から、詩と歌では、一通りも二通りも苦勞しているだけあつて、文章など素晴らしいもんだ。

勝治なんか、議論しても歌っているようなもんで、綴方生活に科学的な綴方を論じていながら、あれでみると、「科学なんてロマンチズムの別名」だと、すぐ善意に誤解されるように書いている。もちつと書かしてみたいというのは、友達全部の注文で、勝治の友人の、氏家芳治なんか、勝治の話の出るたんびに、そう言っている。

5、社会教育家・氏家芳治

その氏家芳治だが、つい先号の本誌に、読方教材の指導を書いたものは、あの通り光っている。あいつはなんでもものにこる。たちで、それだから、それは、よいことも悪いこともある。

この四月、尾澤正男が村田から、氏家の前任地赤井に移って行ったが、「芳治が、なんからなにまでやったんで、やりにくくて仕様がな」と、こぼしていた。

ことほど左様に、志田の芳治は赤井の社会教育家だったのだ。運動、弁論、青年とまあなんでもやつ

たのだ。

あんなやせた身体によくまあ、あんな実践力があるとは、衆目の一致する驚嘆である。

6、正男の神経

話のついでに、村田から赤井に行った尾澤正男のことを書くが、あいつのはすでに昨年十月号かに、綴方の論文が、本誌にのつているから判るだろう。「教室から街頭へ」あいつの教育は歩いて行きつつある。この頃では文集を出したりして、芳治以上の活動ぶり。「あんないい校長はない」なんて、会うたんびに悦に入っているから、奴は今度はのり出せるだろう。

とても神経の鋭い奴で、人の話を嘘をつくなら三十転位して視ているんだから、一寸ものが言えない。村田にいたころは、ちようど新しく変わってきて、鈴木道太と、けんかをしたり仲よくなったりして磨き上げていった。童話もうまく、書もよし、雑文を書いた教育論叢あたりの読者をおならしている。

鬼才の閃きはみんな知っているから、しつかりやったら未恐しいもんだらう。

7、門之助と冬二

土曜会では、門之助と冬二こと鎌田孝が一番気があつていた。門之助の、先号の「農村教師の綴方感想」なんかいいもんだ。今は東京に遊びに行っているが、学校でことに綴方を中心とした国語経営には目覚ましいものがある。学校中の綴方の題

目を集めて、せっせと研究したり、または新しい「綴方論」を教育論叢に出したり、「機関車」なんていう文集の題をみただけでも、その清新な頭と詩魂がわかるだろう。

北村良三、村瀬力、とたくさんペンネームで全国に売っている。

鎌田孝は図抜けたピアノの腕を持っているが、学級経営でも、天才である。国語教育人中、あれくらい正直な男はちよつとあるまい。論叢の編集者で、「綴方教育の新研究」を出した谷村四郎が、鎌田はちよつと「父と子」のバザロフだと評していた。このバザロフは、ひたむきな点で、小泉校を持たしている。

8、親父・山中覚治

山中覚治である。農村国語教育論で、若手の人気をばくした乾校長の所に、青根から仙人山中が首席となってきた。ところでたちまち、小泉学校が光ったというのは、もとからいた孝と高橋光夫が、山中と一緒にきた遠藤章に、まるで、十と一の電気のように吸いついっちまった。それほど四人はいい男、山中と遠藤と鎌田と三人で、教育を論ずるありさまは素晴らしいもので、ちよつとこのごろ流行のボクシングを声にして出したようなものもある。それを乾校長が楽しそうに眺めているんだから、校長もまたボクサーくずれの名にそむかない。

山中覚治には本誌創刊号に堂々たる綴方教育論

がある。こつこつとして本を読みながら、親分肌な人のめんどろを見る男で、その温情にはほろりとなるものがある。

9、熱情・高橋大虎

白石の高橋大虎は二回目から、土曜会に集った。とても熱情家で、読方教育は、教材内にとどまらすべきか、あるいはまた文意をより高き読解としての現実へ適応すべきかについて鈴木道太と火の出るような討論をした。きちんと座り直して体験をまぜまぜまくし立てるのにはさすがの鈴木道太も、顔まけのていたらくであつた。もつとも、白石の国語教育を大泉義三郎と二人で背負っているのだというから、さもあるべきこと。

白石には人がないと、よく人が言う。けれども、北郷剛一や大虎などが、おもしろおもしろいせぬ扉になつてゐる。北郷のことはあとで書くが、とにかく高橋大虎の読方教育には、一種、クラシクな正統派のがっちりさがある。

第二話

人らみな涙ありき

しみじみと炬をかこんで話を語る冬が来た。ぱちぱちと木がはぜる。赤い火の中にくつくつと芋が煮えたりして、音もなく雪が落ちてゐる村落。遠くで、びよおん！ とはかなく気笛が鳴ったりする夜。国語を愛している人はみな涙もろい。なかには木の枝みたよな者もいるけれど、もちろん、

そんなのはまがいもんだから大成しつこない。

文学は感情の表現だなんて言われてるんだから、とにかくとして国語教育人が文学を解さなければならぬ以上、国語人たるものの肌は、情の肌とならねばならぬゆえんである。

そこで今度は「人らみな涙ありき」といったところで、国語教育人としての他の特質を主題に書いてみよう。

10、北郷剛一のひげ

十一月かの人物評論に、佐々弘雄が、末弘殿太郎を論じる時に、彼の「短身」を焦点としてやっていたようだ。

それにならつたわけではないが、筆者も北郷剛一のひげを焦点としてやっていたと思う。と言うのは外でもないが、北郷剛一を考えた時に直ぐびんとくるのが、なんと彼のひげなんである。まばらなようで濃いようで、痛いようで懐かしいようで、なんとも言えない人間北郷の、涙もろいひたむきな温情人としての全面が、あのひげの蔭に眠っている。

大白石校をびくともさせない強力な意志が、だから彼のひげの中にあると言つても過言ではない。

現在は阿刀田博士なんかと古墳なんかを調査して、一かど考古学者であるけれども彼の国語は、とにかくとして仙南では相当なものである。

情があつて、力があるから、若い者がよく募つて集まる。若い者がよく集まらないような者に、古来大人物になつたものがないと言つては行かぬ。

北郷をみるとなるほどそうたとしみじみ思う。

11、二瓶英記と同情学級

同情学級と言うと変な名だが、これは、彼が自分の学級を「同情」によってつなこうとする意見を尊重して筆者の名づけたものである。彼らしい味が出ているではないか。

二瓶英記から感ずる句いは、宗教的なものと、学究的なものとのカクテルである。彼が机の上へヘーゲルの歴史哲学なんかをひろげて、茶釜をちんちん鳴らし、ダルマの木彫りなんかを飾っておくのは、まったく「いいところがある」のである。それだから、彼の研究も、てらわず、昂らわず、こつこつと、孤独の道を歩く。彼は決して他をそそのかさない。よく人を賞める。

だが、自説を固持すること彼ほど強く、しつこいのを筆者は知らない。この性格が長所になったり短所になったりして、元涌谷に居た時など、随分と誤解もされたらしい。それでいていつもよく拓けるのは半面の長所がたち勝っているからである。彼の指導する子供の綴方が、よく人間の真実をみつめて涙ぐましいまでに素朴なのは、故あることである。

12、平間初男

夜中の二時、しんと寒い六畳の部屋でしばしば遠い鶏の鳴声が聞こえた。

―バットがもうないな。

平間初男が寝ている床からむっくり起きた。

―二時だぞ、売屋がもう眠ってしまったるぜ。筆者は驚いて止めた。だが、こんな冬の夜更けに、全くバットでもなければ、なかなか話は味のないものなのである。

―いや。

とかなんとか、彼はもうどてらの上に、ぐるぐるどへこ帯を巻きつけているのだ。

―起こすんかい。

―うまい具合に、用便になんか起きたりするもんだ。

と、平澤のあの二三十戸の道をカタカタと足駄を突つ掛けて走つたものである。

ところで、平間初男の国語教育の道は、このやり方と、全く反対である。彼は決して「まぐれ当たり」を好まない。こつこつと地道に進んで、あくまでたくましい実践に話させている。だから彼の発表するそのつどの論文も決して華やかな香はないが、なにか哲学的で難解である。

それで、見る人によつては、少しペタンチックだなんて言うが、彼の意図は決してそうではないのである。

巨理に出でからは、着々と研究を進めて、今では、押しも押されもしない、ピカ一である。

13、小澤五郎

学校を出でから、筆者は長いこと小澤五郎と会う機会がなくて過ぎた。ときたま市内の銀バスなんかで、子供をつれてのり込んでるのを、かい間みるだけである。

ところで、それが最近、玉浦の教育参観と、萩野の両県合同の研究会で、はじめて長いこと話を語つたのである。

―な、どうだ、な。

とあいつは言うのである。

恋愛のことや結婚のことなんか、具体的な生活は言うことをはばかるから止すけれど、なんとも言えない温情をしみじみと感じたものである。そこで、筆者は、今更のように、小澤の顔を眺めたのであるが、正直を言うとお小澤の顔は、遠くからみると、実に理論的に先鋭であるが、よくよく見ると、実は柔し過ぎることが判る。

どっちが本当の小澤であるかなんて、センサクする必要もないけれども、だから彼の論ずるのを聞くと、実に鋭い所を突いていながら、大きな隙を残したりする間ののびたところもあるのだ。

館腰の学校をひとりで背負つて、このごろはまた、なにか計画しているらしい。平間と共に、同期の卒業であり、これまた仙南のピカ一たることを失わない。

14、石垣達郎と素直な読方

国語教育人の人情話をやるつもりのところ、いつか、仙南国語教育人というところに落ちてしまつたようだ。

仙南国語教育界の大御所としては、今では少し後衛だが、やっぱり石垣にとどめを刺すであろう。人も知る昭和四年の県下国語の発表会で刈田郡は福岡校からのり出し、たちまち委員に挙げられて、

大きいところを見せたものである。

本誌十月号に「自己を語って」素直な読方を今後の問題にしているが、ことほど左様に彼の読方は、素直である。淡々として大河の流れるように読解の工作が進められて、深い彼の落着いた声が、二つの音楽みたように、出るのである。

村田には爾来、一癖も二癖もある者が多い。鈴木銀一あたりがなんのかんと言うし、佐藤鶴太郎、松野省三などの血のありあまつてる若者から、国語の文検予備を持つて大沼精一郎、国語の中等教員の資格を持つ菊地六合同司など、それがみな石垣を中にして、四海波風も立てないのだから、その方面でも、相当な腹である。

第三話

築きし人々

宮城県における国語教育の異常な躍進はせいぜいこの四分の一世紀間の出来事である。その以前宮城県国語教育の基礎構築に従事した人々、例えば、玉澤正吉氏とか、氏家丑治郎氏とかのことは、話には聞いていても、筆者らにとっては、遠い昔の夢である。

だから、筆者がわずかな視野から問題にするのは、せいぜいこの四分の一世紀間に、光芒を放った人々で、しかも、黄昏が薄暗く地にはつても、なお空映する光芒を、若い国語教育人に投げかけている人々のことである。

この地上の上には、絶えず暁の光りが、人々を

ゲンワクしながら、しかも絶えずもの哀しげに晚鐘が鳴り響いている。過去と未来をつなぐ一線を、人々は決して見る事がない。それでいて、時の絶え間なき足取りのなかに、未来はいつも勝ちほこつて、胸を張っているのだ。

ところで、筆者はまず、今は田尻にときめく、本県国語教育の大御所、人間・佐々木茂吉を取上げよう。

15、佐々木茂吉の人間性

佐々木茂吉に会った人々の、第一に感ずることは、彼の比類なき「才人」の面影である。

筆者は、彼の前任地「鹿島台」を訪れて驚くべき彼の国語教育経営の片鱗に接する前に、しばしば紙上において、たとえば「ユーモア教材の研究」と言うような、研究を見て来た。それらによって、筆者の印象を形成したものは、まだ見ぬ彼が、「老成」していると感じるまでの、大家面である。面はメンと呼ぶべし、ツラではありませぬぞ。

筆者は、佐々木茂吉なる人物が、たとえば西向の四畳半に寂として坐り、人生の遙かなる高所を眺めている老境円熟を思っていたのである。しかるに、なんと、その面影の儂しや。佐々木茂吉の実物は、まだ五十頁位の、恋愛の特等席を用意しているといつても、誰も不思議とは思わないほどの美男子なのである。美男子ということは、少くとも三十歳以下の人類に通用する言語でありますぞ。だから、筆者は、なんとなく、肌が反感みいたいなものを持つまでに、妬けたのである。

ところが、茂吉さんには、ほろりとなる思いやりがあるのである。言ってもらいたい言葉、話してもらいたい機会を、彼はまるで定石みたいに、びちんぴちんと言ってくれるのである。これは実に、なみなみならぬ人生の兵将である。人生の裏路を、歩くだけ歩き通したと言うほどに、彼の成熟があるのに、あの若々しい弁舌はなんであろうか。

まことに、聖にして、美にして、壮なる芸術を、この前世紀の国語の炬火は持つているのである。

16、佐藤正人と巴里祭

佐々木茂吉を語る時、ひとは佐藤正人を語らねばならぬ。筆者は、河北の文芸欄などで、彼佐藤正人の筆陣の冴を、しばしば拝見する機会を持った。ペンを通して見る佐藤正人は、決して、その風貌を如実に物語る彼ではない。素面の彼は、実にサツソウたる近代人である。

ルネ・クレールの「巴里祭」という映画がある。その映画の男の主役、とんと名を忘れたが、流し円タクの運ちゃんや、それが祭の歓楽が過ぎて、巴里に白い夏が来る頃、爽やかなアスファルトの舗道を、過ぎ去った恋情の思い出に、憂鬱な顔をして歩くのである。その運ちゃんの、渋いプロフィールが、実に、彼佐藤正人なのである。

そのままの顔は平調で、やに謹厳であるけれども、どうかして笑ったり、眉をしかめたりすると、とても深いニユアンスが、ポーと、立体的に巾広く深まるという顔、読者よ、人はそこに、彼佐藤

正人の、底知れぬメスの刃を想わぬであろうか。

後輩に対する思いやりがとて深く、二度の印象で、筆者らは、すっかり傾倒してしまった。年の順にならべて、佐々木茂吉、佐藤正人、それから一度書いた横澤文質とこの三人は、宮城県国語教育人の三兄貴である。

17、加藤金三郎の酒間問興

忘れっぽい人には、忘れられてしまったかも知れぬが、自由主義綴方の華やかなりし頃の第一人者、加藤金三郎の名を、綴方の道を歩く旅人にとつて忘れられぬ人であろう。その頃の雑誌『赤い表』によって、赤い鳥をそのままの綴方と童謡で喧伝したものである。

今は、巨理校の綴方主任として、今は、こつこつと綴方の一本道を歩いているらしいが、ライラクな、洒落の判る通人である。酔えば、直ぐ、坑夫の描写をやる。この即興たるやお手に入ったもので、そこはそれ、何と言つても、綴方で苦勞しているから、堂々たるもんである。

あー、なんとかお山に、カントラさげて、

と洪い声で前奏するや、彼はツルハシを持って、身振りよろしく、石炭を掘るのであるか、ああなんと、人の世の綴方の教師たるもの、あに石炭を掘る坑夫と異るところあらんや。こつこつと兄貴のうちなる鉱石を掘り出して、真真正しき人生の生産に役立たせるのであるから。

18、宇津志健と松島の宿

加藤金三郎を掘り出す時、本郷兵一出でてなきあとの、本県綴方教育界の長老、東二番丁校にときめく、宇津志健を、取上げねばならぬであろう。初等教育学界の綴方部長として、その三段構えは、つとに天下周知のもの。

五年位の昔になろうか。筆者は、今『赤い鳥』の復刊号で孤軍奮闘している鈴木三重吉の綴方講演会を企てたことがある。成功のうちに会が終わつて、三重吉、健、筆者の三名は、童文社の好意による松島一泊を試みたのである。その夜、酒を飲んだかどうか忘れたが、——ああ、筆者その頃は酒も煙草もたしなまざる、純情可憐なる清教徒で

ありましたぞ——三重吉先生に対して、我が健先生は実に堂々の論陣を張つたのである。

だがしかし、肩怒らしてやる、あれではありませぬぞ。そんな野暮臭いことを、どうしてこの天下の粹人がいたしますものか。ところで、話は、郷土芸術・人形・映画・社会思想・CTCと、実にガイハクにまくし立て、筆者如きは、遠い世界のことなのよ、と想つて謹聴していたのである。それでいて、ふればとろりとなるようなあの感情の肌の好き。ここに、三兄貴の上を越す、兄貴のゆえんがあるのかも知れない。館腰の会では、佐々木茂吉、正人の先輩が、口を極めて賞讃していた。

校長は子どもに対してもつと威厳をもてという人々に

菊地 新

校長は子どもに甘すぎる、やさしすぎる

もつと厳格に、権威をもてという人々よ

教育者の権威とはいったいなんでしょうか。

子どもにこわがられる先生こそ、先生らしい先生というのでしょうか。

私もむちをふるつて子どもにこわがられた時代がありました。

しかしわたしは、そんな若い日の自分はずかしく後悔しています。

先生も人間です。

いたずらをすれば叱りたくなくなります。

喋った時には、満場哄笑、また哄笑、なんとその機眉を捕える人生道の達者なこと、誠にタンゲイすべからざるものがあるのである。

くめどつきせぬ温情、話せば話すほど底知れず開けて来る人生の面のひろさ、深さ。それでいて、当人は熊の出る開墾地から出て来たと言っているが、少しよく見ると成程コーカサスあたりの住民みたい、どこか大陸的な風貌をしている。

20、長田亀太郎と息子達

下増田の長田亀太郎と言えば、忘れてる人が多いかも知れないが、国語教育の捨石としての功勞を忘れてはならない。一人の傑作の出るためには、多くの下積を歩いている。そして、ひとは裏路を歩きはじめると、なかなか表へ出るのがオツクウになるのである。

機会が、いつも十字路で待っている、この裏路散策者達は、いつもその「切り札」をしまいこんで出しながらないのである。長田亀太郎はそうした人である。国語に対する彼の熱愛と見識は、すでに堂々たる大家であることが、一部の定評である。彼は「人間の読方」を、深い感情の陰影の下で、主張している。

いつか筆者は、彼の「ふか」の授業を見た。老砲手が、ぐつたりと砲身にもたれかかり、生き返った彼の息子の歓呼のなかで、しいんとしたうつろの中に、遠い水平の白雲を見ている、あのシーンに進んだ時、人間長田の眼に光る涙を見た。まことに息子は生きて帰った。ああ、老砲手よ、お前

はその夜、このむさくるしいハンモックのなかで、どんな感慨と共に眠るか。

そして、長田亀太郎の息子達は、一人は二高に、一人は中学に、彼の全希望をかけて、歩いているのである。

彼はいつもこう言う。

——おれの、教育の歩みは不偶だった。だからおれは、おれの息子を育てることによって、その息子の成長によつて、新しい貢献をしたいと。

この言葉は、つくづく思うに、彼の、裏路の運命に対する、反逆と愛撫であろう。彼の涙した老砲手の息子は、青い海から大地に生きて帰った。そして、長田亀太郎の、あの人生トランプの切り札である息子たちは、揚々と表路を、優れた素質と純情をもつて、歩いている。

春宵まことにおぼろ、サモワルにたぎるコーヒーを、ぐいと飲んで、さて、筆者は最後に、大河原の石川おんさんを、夜話のしんがりを選ぶほう。

21、絶えざる微笑石川清治

大河原の石川清治は、いつ見ても、唇にうつすらとした微笑をたたえている程の人物である。口が笑わない時は、眼鏡の下の静かな瞳が、そしてなんにも笑わない時は口ひげがいつも、温かい微笑を見せているのだ。

魂が心臓の下で、いつも静かに息しているからであろう。筆者がいつか、前任地から南下する時、ある校長がこう言ってくれた。

——大河原には、国語の石川が居るよ。少しは

古いかもしれないが、なかなかガツチリしてるはずだ。

そして筆者は、まだ一度も彼の国語の授業を拝見する機会を持っていない。今では、若手の清野が、郡下の衆望を一身に集めているらしい。この清野のことは後で書くが、石川は、国語では、現役から少し遠いというのが定評である。だが、その微笑の持つ光芒はやつぱり国語である。この微笑は、少しく酔った時に、実に明るく輝く。

読者諸君は、そのモーマクの中に、アドルフ・マンジューのすました微笑を映して欲しい。それから、自由よ、われらに“のなかの、あの百萬弗をもらった老サラリーマンの微笑を映して欲しい。そして徐々に、本当にその印象をこわすことなく、ほんとに徐に、それを一つに合せて欲しい。そうすると、石川清治の微笑が、静かなやさしい階調を持つて、ささやくのである。人間の魂が、その本質的な統一性を持たなくては、あんな微笑はできないものである。

ヘルンが、その人を見ようと思つたら、「笑い」を見ろと言つた。騒々しい哄笑、くすくす笑い、爆笑、みなその性格が表れるというのである。

深い湖のような。そしてそれに流れる白い雲のような、そんな絶えざる微笑こそ、国語の微笑である。

(第一話「国語教育研究」第2巻4号、第二話同第3巻1号、第三話同第3巻2号より転載。転載にあたり、旧かなづかい・旧字体を直しました。)